

第22回地方独立行政法人鳥取県産業技術センター評価委員会議事録概要

会議の名称：第22回地方独立行政法人鳥取県産業技術センター評価委員会

開催の日時：平成25年3月21日（木） 午後2時～3時

開催の場所：知事公邸（第2応接室）

出席者氏名：別紙出席者名簿のとおり

会議の概要：以下のとおり

1. これまでの評価委員会の活動状況と今後の課題（フリートーキング）

<主な意見>

委員	委員発言	意見に対する回答、対応
辻委員	<p>○スタート時から見ているので、最初に比べれば今は改善していることは確かだとは思いますが、やはり県内企業への助けの部分がどうしてもこの評価委員会の資料の中では見えない。</p> <p>○相談件数だけが出てくるので、一体どのレベルの問い合わせに対してどんな答えをしてきたのかということについて書類上で見えてこない。ヒアリングに行っても、企業ごとに求めているものもレベルも違うのでよく分からない。</p> <p>○産業技術センターの企業へのサービス、指導、コンサル機能の実態が全然つかめない。相談件数、アンケートの結果が評価指標になると思うが、それではいつまでたってもよく分からない気がする。</p> <p>○件数だけで結果が上がってくるものに対してどう切り込んでいくか、評価もマンネリ化していく危険性もある。</p>	<p>○企業の本当の生の反応、声があればそれが一つの目安にはなるのだろうと思う。件数は結果であってそれぞれの質が大事。新しい評価委員の体制の中でそのようなことが表現できるのか考えてみたい。（事務局）</p>

副井委員長	<p>○事業報告の際に理事長だけが発言するのではなく、詳細な部分は、現場の各所長がもっと発言をする機会を作った方がいいのではないか。そうした方が、実態がある程度分かると思う。</p>	
辻委員	<p>○役所の事業評価は、自己評価がベースになっている。文部科学省の大臣政策評価の委員もやっており、そこも分厚い資料で自己評価を作っているが、統計のとり方一つでいい結果が出せるような方法もある。結果としては、一向に自殺は減らない、いじめも減らない、世の中を見たら何もよくなってないと思うが、自己評価には何かいいことが書いてある。よって、なかなか評価をするのも、本当のことを捉えるというのはものすごく難しい。自己評価を無視するわけにもいかないので、評価項目を工夫するしかないと思う。</p> <p>○例えば、相談件数について、相談の難易度を、A、B、C、Dぐらいに分け、それぞれごとに相談件数がいくらあり、それに対する満足度がどうだったとか、もっと詳細に分析できるような方法にして、そのことにより損害額がいくら抑えられたなど分かれば、良い相談かどうか判断できる。電話で対応したのか、現場に行って教えたのか、実験して結果を示してあげたのかとか、どのレベルの相談に対応をしたのかというのが、全部トータルになっていたら分からない。</p>	<p>○万を越す相談件数なので、職員が相談レベルを峻別するのも大変かもしれないが、検討してみたいと思う。(事務局)</p>

<p>谷口委員</p>	<p>○パテントは、価値あるものであるかないものかは、数字で出てくる。パテントに幾ら使って幾らもうけたかは非常に客観的なメジャーの一つになると思う。パテントが幾ら成果を生んだか。結果的にはそのパテントで産業技術センターが税金がなくても十分やれて、おつりができて、それで税金を納めることができるような形が理想。産技センターが率先垂範して、県内企業が、センターの真似をするようになれば地域の産業は振興すると思う。</p> <p>○機械装置等を駆動したことによって得られる稼働率が成果指標になっているが、それプラス、機械をオペレートさせることによって編み出す付加価値分利益が重要。大きな機械を買ってきて、時間で割って償却するのに1時間3万円かかるから3万円くれでは、これはそこに何も利益がない。産業技術センターの方の指導力あるいはノウハウ、その機械の使い方に効率、手順等々で非常に簡単に目的を達成するようなノウハウをのせると、これが本当の一つのセンターの大きな仕事だろうと思う。</p>	<p>○提案のあった件については産業技術センターとともに考えてみたい。(事務局)</p>
<p>辻委員</p>	<p>○産業技術センターだから、いきなり産業レベルの大ききさでやるのではなくて、企業が何かを開発していたときに、ラボから実地の生産の中間が重要だと思う。だからその中間プロセスの検討の代行業務を受託するようなことはニーズがあるのではないかと思う。</p>	

○今までとは違う新しいビジネスをやって、料金を取り、税金を納められるぐらい利益を出せたらいい。普通会社だったら、利益を出そうとか売り上げを伸ばそうと思ったら、今までやっていない領域で、でもできそうな領域に進出していこうとって、新しい仕事をつくろうとする。だから、そういうセンスも、今度こういうことをやってみたらどうだろうかということのを常に考えているようになるといいと思う。

○北海道などがよくやっているのは、例えば健康食品が本当に効くというエビデンスをとるための臨床試験は物すごくお金も掛かるので、本当にこれを食べることでコレステロールが下がったとかという比較的簡単な臨床試験を行う。そういうモニターしてくれる被験者バンクを作り、企業が製品開発した際に利用し、結果を調べるような商売があるが、そういうものを利用するほどの財力は鳥取県内の食品企業は絶対ないため、産業技術センターと鳥取大学で連携して安価でできるようにできないか。鳥取大学で試験したということを記載すれば信憑性も高まる。今成長している産業で成功のための必要な要素だが、多大な費用がかかるようなことを支援するような仕事を探していけばよい。薬事法に抵触する部分があるので、県として正しく指導しないとけない。

<p>房安委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○最高の技術支援をしても、結果が生み出されないということが一番の弱点ではないかと思う。その成果を出すためにはどうしたらいいのかという、逆算するというのも、それぞれのセンターと機構がうまく連携しながら、最終的に結果が出るような状態に進めてくことが大事。 ○支援の方法として、広く浅くやるのか重点を置いて集中的にやるのかというコンセプトを決めることが重要。 ○専門家、企業OBを産技センターに入れるというのも一つの方法だと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○独立行政法人化し、人事も柔軟にできる。そのあたり、またセンターと話をしてみたい。(事務局)
-------------	--	--

第22回地方独立行政法人鳥取県産業技術センター評価委員会 出席者名簿

【委員】

区分	氏名	所属名	役職名
委員長	副井 裕	国立大学法人鳥取大学	学長顧問
委員	谷口 義晴	日本セラミック株式会社	代表取締役社長
委員	辻 智子	日本水産株式会社	生活機能科学研究所長
委員	房安 寿美枝	いなば和紙協業組合	総務部部长

【事務局（鳥取県）】

氏名	役職名
明里 利彦	商工労働部産業振興総室長
富山 哲明	商工労働部産業振興総室産学金官連携室係長